森里川海の物質の環・地域住民の環の再生を考える
ー北海道東部・風蓮川流域における事例よりー

林業試験場　森林環境部　機能グループ　長坂晶子

研究の背景・目的

・根釧台地をはじめとする道東地方は豊かな水産資源と広大な農地に恵まれ、道内のみならず、国内の食糧基地として重要な役割を果たしてきました。その一方で、生産活動にともなう水環境への影響も懸念され、河口に汽水湖を抱える風蓮川流域では、漁業者からたびたび水質改善の要望が出されています。これを受け別海町では「畜産環境に関する条例」を制定（事業者の規制に係る部分については３年間の猶予期間）しましたが、酪農家の反発も大きいと聞いています。

・本研究では、上下流の合意形成をスムーズにするためには、①流域の現状に対する上下流住民の共通認識の構築、②環境保全意識を醸成させるための取り組み、の2点が重要との視点に立ち、風蓮川流域住民への聞き取りおよびアンケート調査により、地域社会の現状を調査した結果を報告します。

研究の方法

１）聞き取り調査：　酪農家に対しては、流域全域で戸別訪問し、27戸からデータを取得しました。漁業者へは、管内2漁協で座談会形式で聞き取りを行い、合計15名よりデータを取得しました。自由回答により得られたデータをテキスト化し、頻出語上位150語を用いて解析を行いました。

２）アンケート調査：　風蓮川流域の酪農家350戸にアンケートを配布（訪問留め置き法）し、地域の生物相をどの程度知っているかについて尋ねたところ、110戸から回答を得ることができました（回収率32%）。回答された生きものの種類と回答者の属性の関係について解析をしました。

研究の内容・成果

●居住地区により異なる自然認識

・聞き取り内容の頻出語のうち、出現頻度が3回以上の単語を対象に居住地と頻出語の対応関係を解析したところ、住民が発する「自然」に関する言葉には地域特性があり、自然認識の空間スケールがかなり狭い範囲であることが示唆されました。風蓮川流域のように、流域スケールで生起する水質悪化の問題では、負荷の供給源から河口域までの距離そのものが地理的な障壁となり、現象の客観的理解を阻む危険性があることが示唆され、合意形成の際留意すべき点と考えられました。

●上流（森里域）の住民と川との関わりが希薄になった？

・アンケートの結果からは、『子供時代』の自然体験の多様さを示唆する結果（図-1）が得られましたが、その一方で、『最近』認識している生物相については地域差や世代差が薄れ一様になる傾向があり、特に川の生きものに関する情報が減少し（図-2）、「川に行く」という機会や行動の減少を反映していることが示唆されました。

Q.　昔よくみた生き物は？

1位	ウサギ	49名が回答
2位	ヤマメ	32
3位	キツネ	29
4位	トゲウオ	22
5位	ドジョウ	21
6位	ヤツメウナギ	20
7位	ヘビ	19
8位	シカ	18
9位	アメマス	17
10位	ホタル	17

図1. 昔よく見た生き物は何ですか？という質問に対する回答上位10種。

	Q. 最近増えた		Q. 最近減った	
1位	シカ	90	ウサギ	57
2位	クマ	39	リス・シマリス	16
3位	キツネ	37	ヘビ	15
4位	カラス	27	ホタル	13
5位	ツル	26	クワガタ	12

図2. 最近増えたと思う生き物(左)、減ったと思う生き物(右)に関する回答上位5種。

今後の展開

・地域住民のかたのお話を直接伺ってみて、「地先」の変化は実感しやすいものの、流域（とくに河口域）の変化までは認識しづらいことがわかり、上下流の情報交流が乏しいことを現していると考えられました。地域単位の取り組みと、広域（上下流）の情報共有に向け、よりよい方法や技術提案に向けて、今後も引き続き調査、研究を進めていきたいと思います。

本研究はニッセイ財団の環境研究助成を受けて実施しました。